きれいなきれいな町

小川未明

青空文庫

あるところに、かわいそうな子どもがありました。かね子さんといって、うまれたときからよく目が見えなかったので、お母さんは、たいそうふびんに思っていらっしゃいました。

あちらにいい目のおいしゃさまがあるといえば、そこへつれていき、またどこそこにいい目のおいしゃさまがあると聞けば、そこへつれていきました。

けれど、どのおいしゃさまも、はっきりなおるとうけあった人はなかったのです。

「お母さん、わたしは目が見えなくても次郎さんがあそびにきてくださるから、ちっともかなしくはありません。」と、かね子さんはいいました。

「ほんとうに次郎さんは、やさしいいいお子さんですね。あんなにしんせつなお子さんはありませんよ。」と、お母さんもおよろこびになりました。

毎日、次郎さんはあそびにきてくれました。

「かね子さん、ぼく、おもしろいご本をもってきたのだよ。いま読んであげるからきいていてごらん。」

そういって次郎さんは、浦島太郎のお話を読んできかせました。

「かね子さん、おもしろい?」

「おもしろいわ、太郎は助けたかめをにがしてやったのでしょう。」

「そうすると、かめがおれいにやってきたのだよ。どうかわたしの背中にのってください、龍宮におつれ申しますといったのさ。」

といって、次郎さんはご本のきれいな絵をながめていました。

「やあ、きれいだな。青や赤やでぬったご門があって、龍宮ってこんなきれいなところかなあ。」と、次郎さんは感心していました。

けれど、かね子さんには、その絵がわかりませんでした。

「次郎さん、どんなきれいな絵がかいてあるの?」と、なみだぐんできました。

次郎さんは、かね子さんが目の見えないのに気がつくと、

「ああ、悪かった。うらやましがらせるようなことをいわなければよかった。」と、後悔をしました。

そして、どうしたらかね子さんの目がよくなるだろうと思いました。

「ねえ、かね子さん、泣くのはおよし。ぼく悪かった、かんにんしておくれ。」

「いいえ、次郎さんが悪いのではない。わたしの目はなおらないって、お母さんがおっしゃったので、かなしいのよ。」

「ぼく、どうかして見えるようにしてあげるからね。」と、次郎さんがいいました。

浦島太郎は、かめを助けたために龍宮へいって、おとひめさまにであったのだから、ぼくもこれから殺生をしないことにしようと、次郎さんは思いました。

「あっちからきたのは勇ちゃんらしいな。」

次郎さんは、往来に立ちどまって見ていました。やはり勇ちゃんでした。もちぼうを持ち、片手にとんぼのかごをぶらさげていました。

「勇ちゃん、とんぼが取れた?」と、次郎さんはききました。

「むぎわらとんぼが二匹と、やんまを取ったよ。」と、勇ちゃんは、

とくいになって答えました。
「やんまを取ったの？」
次郎さんは、うらやましそうにかごの中をのぞくと、大きなやんまがいました。
「どこでやんまを取ったの？」
「あっちの梅の木にとまっていたのだよ。」
黒い目のくるくるした、黄色なすじのある、いいやんまでした。
次郎さんはふところから、浦島太郎のご本をだして、
「勇ちゃんは、こんな絵本を見たことがある？」と、ききました。
勇ちゃんは、きれいな本だと思いました。
「見たことがない。おもしろいかい？」
「これはおもしろいよ。見せてあげるから、勇ちゃん、とんぼをみんなにがしておやりよ。」と、次郎さんがいいました。勇ちゃんはびっくりして、
「いやだ。ぼく、せっかく取ったのだもの。」と、目をみはりました。
次郎さんは、どうしたらとんぼを助けることができるかと考えました。
「君は、浦島太郎が龍宮へいった話を知っている？」
「知っているよ。だけど、あれはおとぎばなしだろう。」
「うそのことは、本に書いてあるわけはないよ。これは浦島太郎の絵本だよ。これと、とんぼととりかえっこをしようよ。」と、次郎さんがたのみました。
「この大きなやんまは、おしいな。」勇ちゃんはやんまをながめました。
「勇ちゃん、いいだろう？」
「じゃ、とりかえっこしてあげよう。」
二人は、絵本ととんぼととりかえっこをしました。次郎さんはとんぼを持って、はらっぱの方へ走っていきました。
「さあ、みんなにげていけ。もうけっして子どもたちにつかまるなよ。」と、浦島太郎がかめをにがしたときのように、いいました。
次郎さんは、かね子さんに、じゅず玉を取ってあげようと思って、原っぱへ三りん車にのってやってくると、やはり三りん車にのった子が、一人であそんでいました。
「君は、どこの子かい？」と、次郎さんがききました。
「ぼくの町はこっちだよ。そうして、ぼくの名は、とんぼこぞうというのだよ。」と、その子はいいました。
「おもしろい名だね。」
「君とぼくと、三りん車の競争をしようよ。」と、とんぼこぞうがいいました。
「ぼくは、じゅず玉を取ろうと思って、ここへきたのだよ。」と、次郎さんは答えました。
すると、とんぼこぞうは、
「じゅず玉は女の子の持つものだぜ。」といって、わらいました。
「そうさ。ぼくは、かね子さんという目のわるい、かわいそうな女の子のために取りにきたのだよ。」と、次郎さんがいうと
「目がわるいの？　そんなら、いいお薬があるよ。」と、とんぼこぞうがいいました。
「ある？　どこに？」
「ぼくの町にいっしょにおいでよ。」と、とんぼこぞうが先になっ

て走りました。

次郎さんはその町がどこかと思って、つづいて走りました。赤い夕やけの空を見ながら、二人がいくと、きれいなきれいな町にきました。たくさん、ちょうちんがついていて、にぎやかでした。

「おまつりがあるの?」と、次郎さんがききました。

「おはぐろとんぼのお姉さんが、およめにいくのだよ。」と、とんぼこぞうがいいました。

「ここは、とんぼの町なの?」と、次郎さんはおどろきました。

「とんぼの町だよ。めったに人のこられぬところさ。君はいい子だから、ぼくがつれてきたのだよ。」と、とんぼこぞうがいいました。

「どこに目薬があるの?」

「あすこ……。」と、とんぼこぞうが、ゆびさしました。

いってみると、むらさき色のびんがならんでいました。

「よくきくかい?」と、次郎さんがきくと

「とんぼの目をごらんよ。みんないい目をしているだろう。」と、とんぼこぞうが答えました。

「どうぞこの町を忘れませぬように。」と、次郎さんは、いくたびも神さまにねがいました。

そうして、かえりには、しんせつなとんぼこぞうに、原っぱまでおくってもらいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　10」講談社
　　1977（昭和52）年8月10日第1刷
　　1983（昭和58）年1月19日第6刷
※表題は底本では、「きれいなきれいな町《まち》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2015年5月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

きれいなきれいな町

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/